

アズキ茎腐細菌病の防除対策

上川農業試験場 研究部 生産環境グループ

成果の要約

アズキ茎腐細菌病の発生態態、被害および薬剤による防除効果を明らかにした。
本病の防除対策として、健全種子の使用とその生産が最も重要であった。
健全種子生産のためには、種子生産圃場における無発生病場産種子の利用、かつ、一般圃場からの隔離および発病株を中心とした抜き取りによって実現することを示した。

背景

○2000年代にアズキ茎腐細菌病が発生し、防除対策が求められる。
○1970年代にも発生したが、種子伝染すること以外は発生態態や被害の詳細について不明な点が多い。

目的

○アズキ茎腐細菌病の発生態態および被害を明らかにし、種子生産圃場における防除対策を確立する。

研究内容

○発生態態を明らかにし、病徴を整理する。
○発病が小豆収量に与える影響を明らかにする。
○種子生産圃場における防除対策を確立する。

1. アズキ茎腐細菌病の発生態態

1) 伝染源は以下のとおり、

- ◎種子伝染
 - 発生病場跡の野良生えや罹病残渣
- 2) 近くに伝染源が存在する場合、外観無病徴個体由来の種子でも病原細菌を保菌している可能性がある。

2. アズキ茎腐細菌病の病徴

1) 典型的な病徴



写真1. 葉身の斑点

写真2. 茎部の折損

写真3. 莢の病斑

2) 発病を見極めるための特徴的な病徴

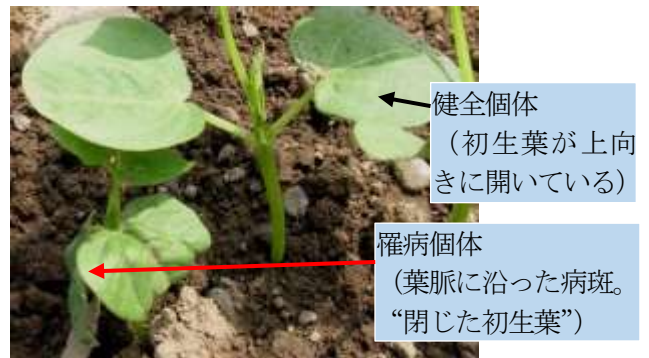


写真4. 生育初期の病徴



写真5. 生育中～後期の病徴

3. アズキ茎腐細菌病の被害

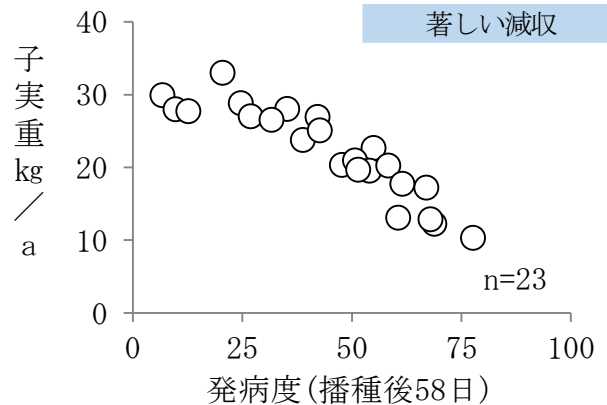


図1. 開花期 (播種後59日) 近日における発病と子実重の関係

4. 防除対策

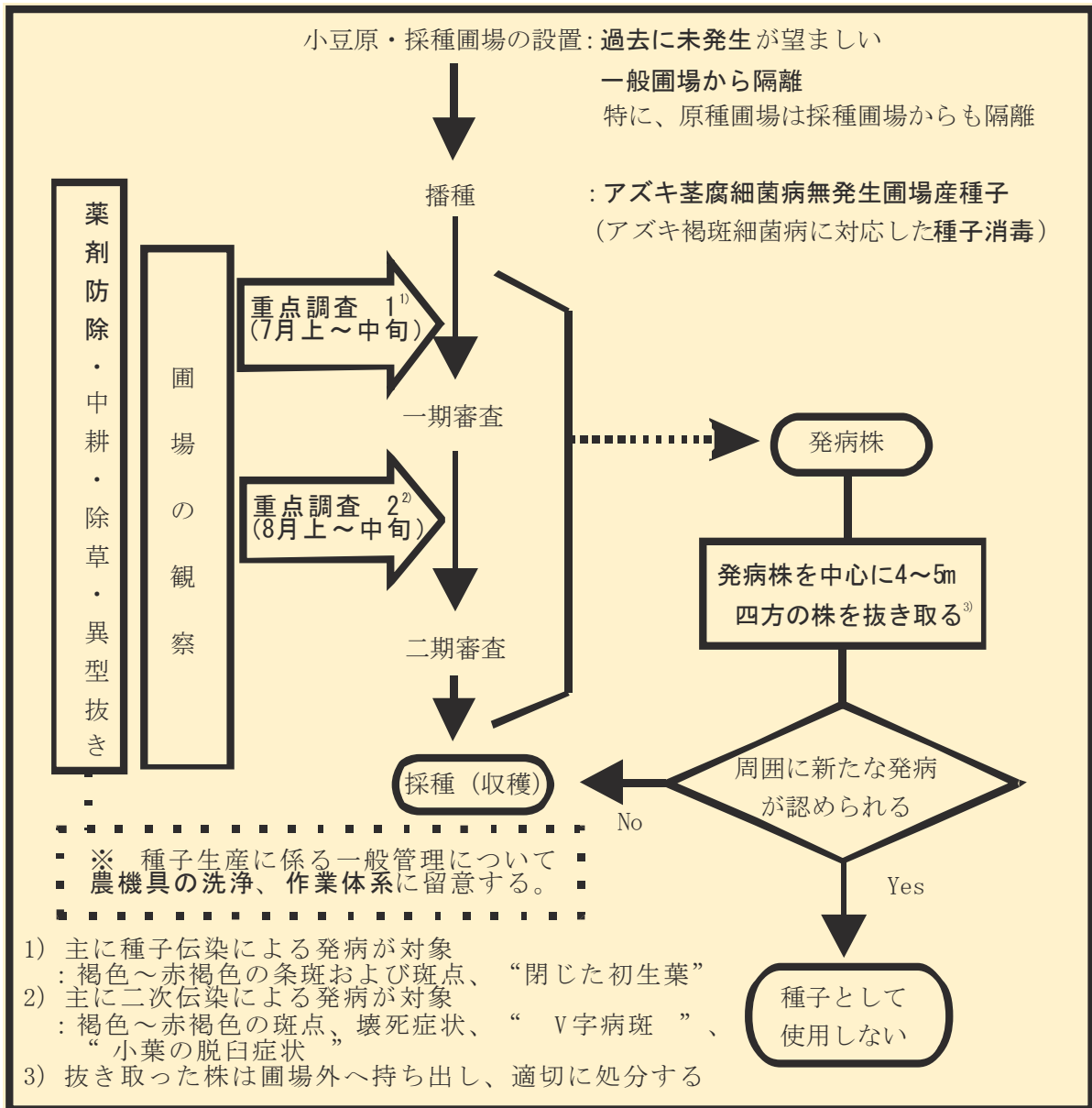
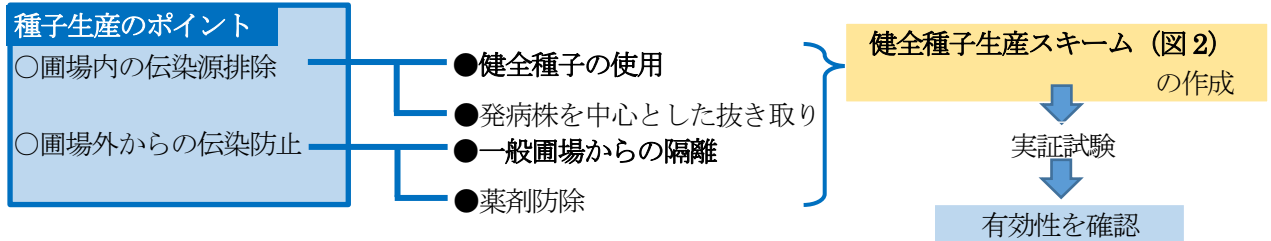
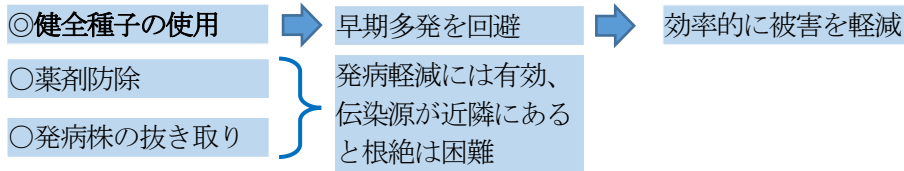


図2. アズキ茎腐細菌病発生地域における健全種子生産スキーム

